第３編　風水害の恐れがあるときの行動・活動

１．個人でとるべき行動手順（自助）

◎個人による時系列の行動手順

風水害の対策は、各家庭における点検・準備、情報収集が基本となります。避難の必要性は各自が判断し、危険が迫る前に安全な場所へ移動するように心がけましょう。

時間経過	自助の行動			日ごろの備え
天候悪化の予報	(1) 気象情報の収集 ・テレビやラジオで天気予報を確認	(2) 災害に備えた点検・準備 ・対策が必要な場合、安全点検や避難の準備をする。		・情報収集先の把握（15ページを参照）
(雨、風、台風等)注意報 発表				・家の周りの片付け
(雨、風、台風等)警報 発表				
天候の確認(外の状況確認)	(3) 状況に応じて避難の判断 ・自主避難するかどうかを判断			・避難場所と経路の確認 ・非常持出品の備え ・家族の連絡方法の確認
避難準備・高齢者等避難開始発令	(4) 災害時要配慮者の避難 ・支援者と一緒に避難	(5) 避難 ・周りに声をかけながら避難	共助の活動 ・自主防災組織で情報共有 ・早めの避難のよびかけ ・避難支援	
避難勧告発令				
避難指示（緊急）発令				

東区で起こった水害

東区の地形は平坦で山がなく、西側に創成川、東側に豊平川及び石狩川に囲まれ、中央部には伏籠川、篠路新川が流れているため、何度も洪水被害が発生しています。

昭和56年（1981年）８月に起こった「５６水害」では、台風や低気圧の影響で二度の記録的な大雨が降り、河川があふれたり、住宅が浸水するなど、東区でも大きな被害を受けました。

(1) 災害に備えた点検・準備

◎家の点検・備え

大雨が降る前や風が強くなる前に、家の周りや家の中の安全点検をしましょう。また、非常持出品などを用意しておきましょう。

家のまわりの点検・備え

窓や玄関の補強

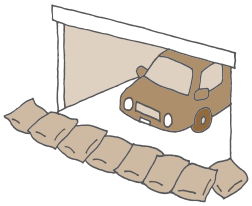
- □ 窓はしっかり鍵をかけて、必要に応じて補強する。
- □ 半地下など、水の流れ込みやすい開口部を、土のうや止水板でふさぐ。

排水経路の掃除

- □ 側溝や排水溝を掃除して、水はけを良くしておく（雪解け前は特に注意する）。
- □ 普段から、ごみや雪を川に捨てない。

周りに置いてあるものの片付け

- □ 風で飛ばされそうなものを固定したり、室内にとりこむ。
（鉢、園芸用品、物干竿、看板など）



家の中の備え

被害を最小限に抑える

- □ 万一の飛散物の飛び込みに備えて、カーテンやブラインドを閉める。
- □ 貴重品などを上階へ移動させる。

水の確保

- □ 断水に備えて、飲料水を確保する。
- □ 風呂に水をはるなど、生活用水を確保する。

非常用品の準備

- □ 懐中電灯、ラジオ、食料品、医薬品、衣類、衛生用品などを手元に用意する。

◎避難の準備

避難情報などが出てからあわてることのないよう、いつでも避難ができる準備をしておきましょう。

避難の準備

避難場所と経路の確認

- □ 避難場所と、安全な移動経路を確認しておく。

連絡方法の確認

- □ 家族との連絡方法を確認しておく。

非常持出品の確認

- □ 最小限必要な荷物をまとめる。安全のため、両手が使えるようにする。
- □ 寒い時期は防寒用品を用意する。

(2) 情報の収集

◎気象の変化に注意

台風や低気圧が近づいたり、急に雲が発達するなど、風水害をもたらす気象の変化は、ある程度事前に知ることができます。「台風情報」「注意報・警報」に注意し、最新の情報を入手しましょう。風速、気圧、降水量などから、どのような状況になるかを考え、安全対策や避難の検討に役立てましょう。

天気が悪化し、災害の恐れがあれば、早めに避難する必要があります。

天候などの情報収集先は　15 ページを参照

◎天候悪化による影響の把握

次のような影響が近くで起きているかもしれません。周りのようすに注目してみましょう。

ただし、風や雨などが強くなる時間帯に屋外で行動することは危険です。外にいた場合、川の近くや低い所に行かないようにしましょう。浸水してしまった場所を移動することは、徒歩でも車でも大変危険です。

雨や雪による影響

- マンホールから水があふれる
- 道路が冠水する
- 家が水に浸かる
- 地下室、半地下室へ浸水する
- がけやよう壁から水がふきだす
- 停電になる
- 下水があふれる、逆流する
- 川の水位が高くなり、水があふれる
- 雪の吹きだまりができる

風による影響

- 風で外にある物が飛ぶ
- 風で屋根がはがれる
- 物置や小屋などがこわれる
- 木の枝が折れる、木が倒れる
- 竜巻や突風の被害が発生する（鉄塔が倒れる）
- 停電になる
- 暴風雪で視界不良となる

身近に起こる「都市型水害」

集中豪雨などで短時間に大量の雨がふると、地面がアスファルトでおおわれているためにしみ込むことのできない雨水が、一気に排水路や川に集まり、流れます。このため、マンホールから水があふれたり、家庭のトイレやお風呂などの下水から水が逆流してしまう「都市型水害」が発生しています。どこででも起こる可能性があり、低い土地や建物では特に注意が必要です。

屋外でのとっさの安全行動

＜雷がなったら＞

- 外にいては危険。建物の中に避難する。
- 電柱や木など高いものから 4m 以上離れる。
- 建物が無い時は、足をそろえて低くしゃがむ。

＜突風・竜巻が起こるときは＞

- 外にいては危険。頑丈な建物に避難する。
- 建物が無い時は、水路やくぼみに身を伏せ、頭と首を守る。

風水害時に注意したい気象情報

天気予報などで、雨の強さや、風の強さの予報に注意し、その後予想される天候の変化や災害被害の発生に関する情報を収集しましょう。

●雨の強さと降り方

1時間の雨量(mm)	イメージ	災害発生状況
10以上20未満	ザーザーと降る	この程度の雨でも長く続くときは注意が必要。
20以上30未満	どしゃ降り	側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。
30以上50未満	バケツをひっくり返したように降る	山崩れ・がけ崩れが起きやすくなり危険地帯では避難の準備が必要。都市部では下水管から雨水があふれる。
50以上80未満	滝のように降る ゴーゴーと降り続く	都市部では地下室や地下街に雨水が流れ込む場合がある。マンホールから水が噴出する。土砂災害が起こりやすい。多くの災害が発生する。
80以上	息苦しくなる圧迫感、恐怖感	雨による大規模な災害の発生するおそれが強く、厳重な警戒が必要。

●風と被害の状況

風速(m/秒)	人への影響	建造物の被害
10以上15未満	風に向かって歩きにくくなる。傘がさせない。	取り付けの不完全な看板やトタン板が飛び始める。
15以上20未満	子どもは風に向かって歩けない。転倒する人も出る。	ビニールハウスが壊れ始める。
20以上25未満	大人もしっかりと身体を確保しないと転倒する。	鋼製シャッターが壊れ始める。風で飛ばされた物で窓ガラスが割れる。
25以上30未満	立っていられない。屋外での行動は危険。	ブロック塀が壊れ、取り付けの不完全な屋外外装材がはがれ、飛び始める。
30以上		屋根が飛ばされたり、木造住宅の全壊が始まる。

台風は夏から秋にかけて多く発生します。台風が近づくと、気象台から台風の強さと大きさ、現在位置、予測進路、中心付近の風速等が発表されるので、情報を良く聞き、備えましょう。

●台風の強さ

階級	最大風速
強い	33 m/秒以上～44 m/秒未満
非常に強い	44 m/秒以上～54 m/秒未満
猛烈な強さ	54 m/秒以上

●台風の大きさ

階級	風速15 m/秒以上の半径
大型（大きい）	500km以上～800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上

身近に起こりうる暴風雪の被害

平成24年11月27日、暴風と着雪により送電線の鉄塔が倒壊するなど、胆振・日高地方を中心に広範囲にわたる停電が発生しました。建物の破損、倒木、道路や鉄道などの交通機関に影響が発生したほか、住民が自主避難をしたり、胆振管内の小中学校・高校が臨時休校となりました。

また、平成25年3月2日～3日、北海道の広い範囲で暴風雪による猛ふぶきや吹きだまり、局地的な大雪となりました。JRの運休や道路の交通規制などが行われましたが、車が立ち往生し、車中や避難途中に動けなくなり亡くなってしまったという人的被害が発生しました。さらに、住家被害等の被害もあり、改めて暴風雪時の外出の危険性や、車が立ち往生した場合に取るべき行動、防寒への備えの大切さが教訓となりました。

(3) 避難の判断と避難

◎自主的な避難が原則

札幌市から「避難情報」が発令された場合は、速やかに避難しましょう。情報の伝達は、テレビ、ラジオ等の報道、広報車等の情報を確認しましょう。

避難する場合は、自分の目で周囲の安全を確認しながら、水害等の程度に応じて、被害の少ない、近隣の親戚や知人の家、収容避難場所などへ避難しましょう。

風水害の被害が予想されるとき、どの時点で危険を感じるかは人それぞれです。また、置かれた状況（住んでいる場所、建物）によっても、危険の度合いや避難の必要性がちがいます。このため風水害の場合は、まずは自ら、避難が必要かどうかを判断することが大切です。

発令の種類	発令の内容	市民等に求める行動
避難準備・高齢者等避難開始	避難行動に時間を要する災害時要配慮者等に避難を始めるよう促す情報	（市民）災害時要配慮者等避難に時間を要する人は、準備を始め、避難をする。 家族との連絡、非常持出品の用意など、避難準備をする。 （地域）災害時要配慮者の避難支援を行う。 （災害時要配慮者のいる施設）施設利用者の安全な避難の支援に努める。
避難勧告	市民等に危険の可能性があるため避難を促す情報	避難場所等へ避難を開始する。
避難指示（緊急）	避難勧告よりも危険度や緊急度が高い情報	まだ避難していない人は直ちに避難する。 避難することが危険であると判断する場合は、命を守る最低限の行動をとる。

※自然現象では不測の事態も想定されることから、避難場所等に避難する行動が場合によっては危険であることも考えられます。状況に応じた各自の判断と対応が必要です。

避難の心得

○安全な避難行動

- 動きやすい服装で、２人以上で行動する。
- 水があふれる前に避難する。
- やむを得ず水があふれている中を避難する時は、長靴は歩きにくいのでスニーカーをはく。

○原則歩いて避難

- 自動車での避難は緊急車両の妨げになるので、なるべく避ける。

○非常用品を携帯

- 最小限必要な荷物を持つ。

2．地域でとるべき活動手順（共助）

◎地域・組織による時系列の活動手順

風水害の危険は時間とともに変化していきます。状況を判断するための情報収集や情報伝達手順をシミュレーションし、確認しておきましょう。

時間経過

- 天候悪化の予報
- （雨、風、台風等）注意報 発表
- （雨、風、台風等）警報 発表
- 天候の確認（外の状況確認）
- 避難準備・高齢者等避難開始 発令
- 避難勧告 発令
- 避難指示（緊急）発令

共助の活動

（1）情報の収集と共有
- 天候の変化や避難に関する情報などを地域で共有する

（2）災害時要配慮者の避難
- 支援者と一緒に避難

（3）避難
- 周りに声をかけながら避難
- 避難支援

自助の行動
- 災害に備えた点検や準備
- 天候の情報を収集

自助の行動
- 自宅待機か、避難するかを判断
- 安全な場所へ避難
- 周囲にも声をかけながら避難

日ごろの備え
- 情報収集先の把握（15ページを参照）
- 地域で自主的に避難できる避難場所の検討や避難経路の確認
- 地域での情報共有の方法の確認
- 災害時要配慮者の把握と支援体制づくり
- 防災備蓄品の確認

災害時にはおせっかいも必要

災害の時は、みんなが心細い気持ちになっています。遠慮せずにおたがいに声をかけあうことが大切です。特に、災害時に特別な配慮が必要な人たちには、積極的に声をかけましょう。

また、自力での移動が困難な人や、情報の伝わりにくい人には、自分からとなり近所に声をかけてくれるようお願いしておくことを促しましょう。

(1) 情報の収集と共有

→ 地震の項目（P13 ～ 15）を参照

◎今後の天候の見通しと避難場所の確認

今後の天候の見通しを確認し、避難の必要性を判断しましょう。

また、避難場所は浸水の恐れがない場所か、安全に避難できる経路があるかを確認しましょう。行政の避難情報が発令される前に、自主的に避難を決めることや、避難行動について役員などが集まって相談をすることも考えておきましょう。

◎地域の情報収集・伝達活動

地域で風水害に関する情報を収集する時は、危険が及ばないよう、天候の変化や周囲の状況に気をつけて行動しましょう。

地域で災害に関する情報を共有するために、住民のみなさんに情報を伝える具体的な方法を決めておくとよいでしょう。

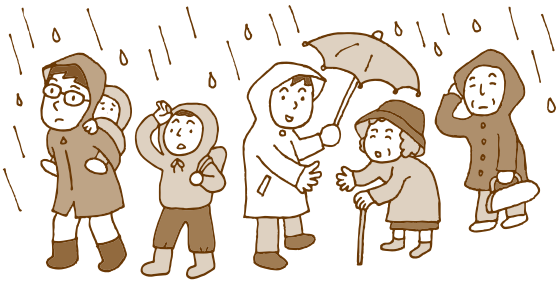
(2) 避難

→ 地震の項目（P16, P22 ～ 24）を参照

◎「避難準備・高齢者等避難開始」の発令後の避難支援・誘導

「避難準備・高齢者等避難開始」が発令されたら、高齢者や移動が困難な人など「災害時要配慮者」は、余裕をもって避難を開始する必要があります。家族や支援者は、早めの避難を心がけましょう。

◎「避難勧告」「避難指示（緊急）」発令に伴う避難支援

札幌市からの「避難勧告」や「避難指示（緊急）」が出た場合は、速やかに避難を開始しましょう。そのときには、となり近所など周辺にも声をかけましょう。

水害の場合は、刻々と状況が変化していきます。もし逃げ遅れてしまったら、冠水した道路を移動せずに、浸水する恐れのない高い所に避難しましょう。周りの状況もふまえて、身を守るための行動を判断しましょう。